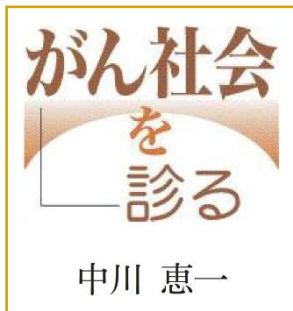


日本経済新聞

米研究所、がんとアルツハイマー病の「逆相関」究明目指す



前回も触れましたが、がんとアルツハイマー病は世界的にみても怖い病気の2強といえます。両方の病気を経験するのはツライはずですが、そんな気の毒な患者はめったにいません。アルツハイマー病の患者はがンを発症しにくく、がん患者はアルツハイマー病になりにくいのです。

がん患者の場合、アルツハイマー病の発症リスクはがんではない人と比べると25~35%低下します。逆に、アルツハイマー病の患者のがんのリスクは半減するとされています。

米国立老化研究所 (NIA) と米国立がん研究所 (NCI) は3月、2日間の共同ワークショップを開催しました。NIA と NCI はともに米国立衛生研究所 (NIH) の傘下にあります。NIH は米保健福祉省公衆衛生局の下にあり、1887年設立の米国最古の医学研究の拠点機関です。トランプ政権は NIH の予算や人員を削減しており、米国と世界の医学研究が危機にひんしています。

NIA と NCI の共同ワークショップのテーマは "Cancer-Alzheimer's Disease Inverse Correlation (CADIC) "でした。「がんとアルツハイマー病の逆相関」を CADIC と略語にするあたり、テーマへの本気度を感じます。副題に「生物学的メカニズムから治療の可能性まで」とあり、逆相関のメカニズムを探るのみならず、2つの怖い病気の治療につなげることが研究目的の一つとなっています。

悪性脳腫瘍の中で最も難治性の神経膠芽腫 (こうがしゅ、グリオブラストーマ) の患者の死亡後に採取した脳組織を調べたところ、アルツハイマー病に特徴的なアミロイド β 、およびリン酸化タウの沈着が見られた場所で、腫瘍細胞はほぼ見られないことが示されました。5年生存率が2割以下とされる難治性脳腫瘍を、アルツハイマー病が防いだといえるでしょう。

アルツハイマー病が「抗がん作用」を持つメカニズムは十分に解明されてはいません。CADIC ワークショップでは、アルツハイマー病のリスクを高める APOE4 遺伝子が作るたんぱく質が腫瘍免疫を活性化し、抗がん作用を持つのではといった議論もなされました。

アルツハイマー病にかかればがんのリスクが減るといっても、避けたい病であることに変わりはありません。この病で死んだ私の父を介護した母の悲しみと苦労は忘れ難いです。

がんと同じく、アルツハイマー病の遺伝性はあったとしてもわずかです。ヘルペスウイルスの感染予防や悪玉コレステロールの低減で、ある程度は予防可能です。次回、取り上げたいと思います。

2026年5月27日